

令和2年度第1回野田市保健医療問題審議会次第

日 時 令和2年8月19日（水）

午前11時から

場 所 保健センター3階大会議室

1 開 会

2 市長挨拶

3 議 題

(1) 会長の選任について

(2) 第2次野田市歯科口腔保健計画の策定について（諮問）

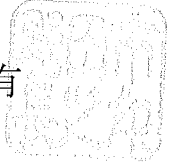
(3) 野田市の歯科口腔保健の現状と課題等について

4 閉 会

野保保第409号
令和2年8月19日

野田市保健医療問題審議会
会長 鈴木 隆一 様

野田市長 鈴木 有



諮 問 書

第2次野田市歯科口腔保健計画の策定について、野田市保健医療問題審議会条例第2条の規定に基づき、別紙諮問要旨のとおり諮問します。

諮 問 要 旨

市が策定する歯科口腔保健計画は、野田市歯科口腔保健の推進に関する条例第7条の規定により、「市は、基本的施策を総合的かつ計画的に実施するため、歯科口腔保健に関する基本的な計画を定めるものとする。」とされております。

現行の野田市歯科口腔保健計画が本年度で計画期間が終了することから、市民一人ひとりが生涯を通じて歯と口腔の健康を守り、自分の歯で生活できるようにするとともに、次世代を担う子どもたちが歯科疾患予防の基礎知識を身に付けられるよう、市全体での歯と口腔の健康づくりの推進を目指すことを目的として、新たな推進計画を策定する必要があるため、第2次野田市歯科口腔保健計画の策定に係る事項について御審議いただき、御答申くださいますようお願い申し上げます。

野田市における歯科口腔保健の現状と課題

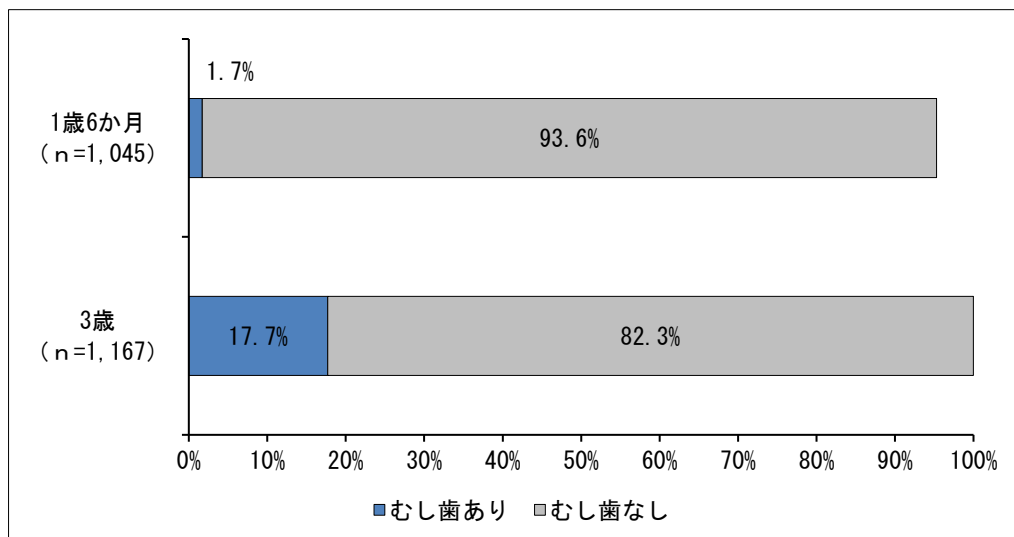
1 乳幼児期

(1) 現状

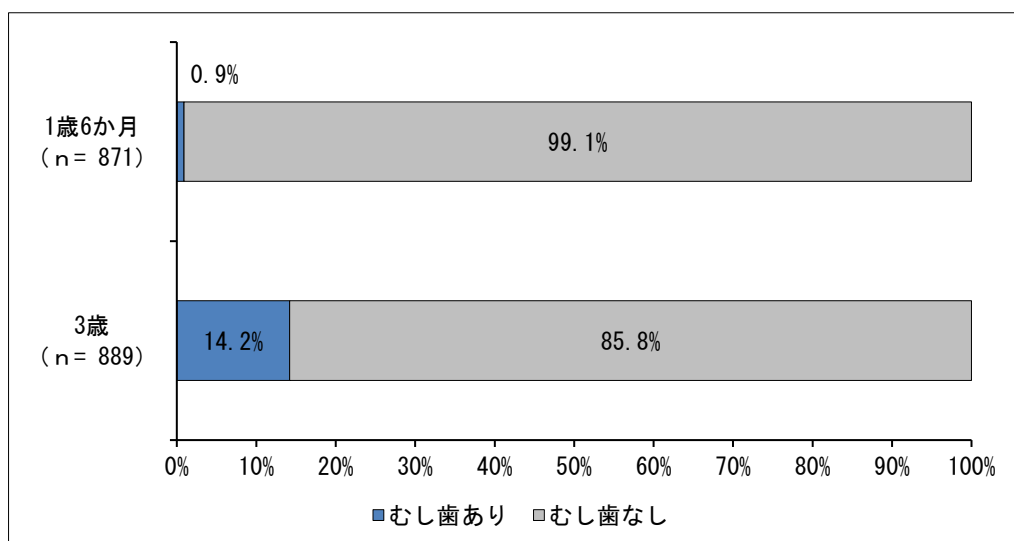
① むし歯の保有

年齢が上がるごとにむし歯の保有率が増加しています。食事内容の多様化など生活習慣にも変化が見られるため、口腔内環境も変わり、むし歯が増加していく時期となります。

平成 26 年度と比較して、1 歳 6 か月児及び 3 歳児とも、むし歯の保有割合は減少しています。



資料：平成 26 年度乳幼児健康診査

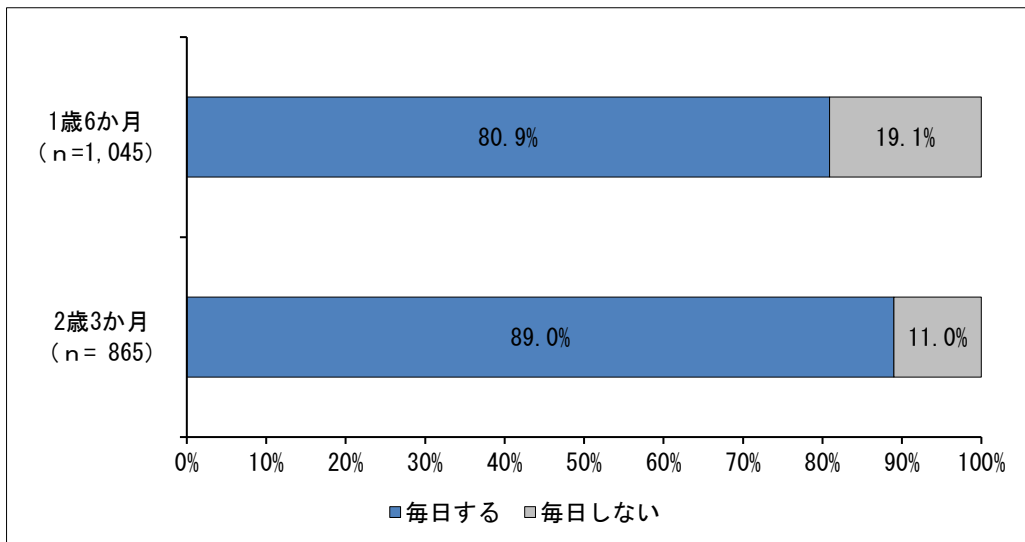


資料：令和元年度乳幼児健康診査

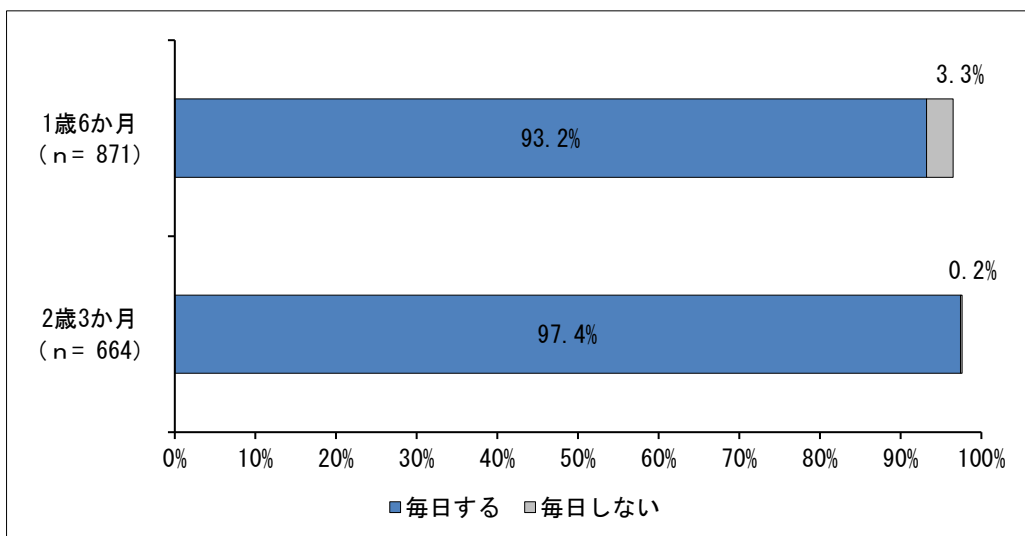
② 毎日仕上げみがきを実施している

1歳6か月では、仕上げみがきを嫌がる子や、生えている本数が少ない子もいるため、2歳3か月と比較して毎日の仕上げみがきをする割合が少なくなっていると考えられます。

平成26年度と比較して、1歳6か月児及び2歳3か月児とも、毎日仕上げみがきを実施している割合は大幅に増加しています。



資料：平成26年度乳幼児健康診査・2歳3か月歯科相談

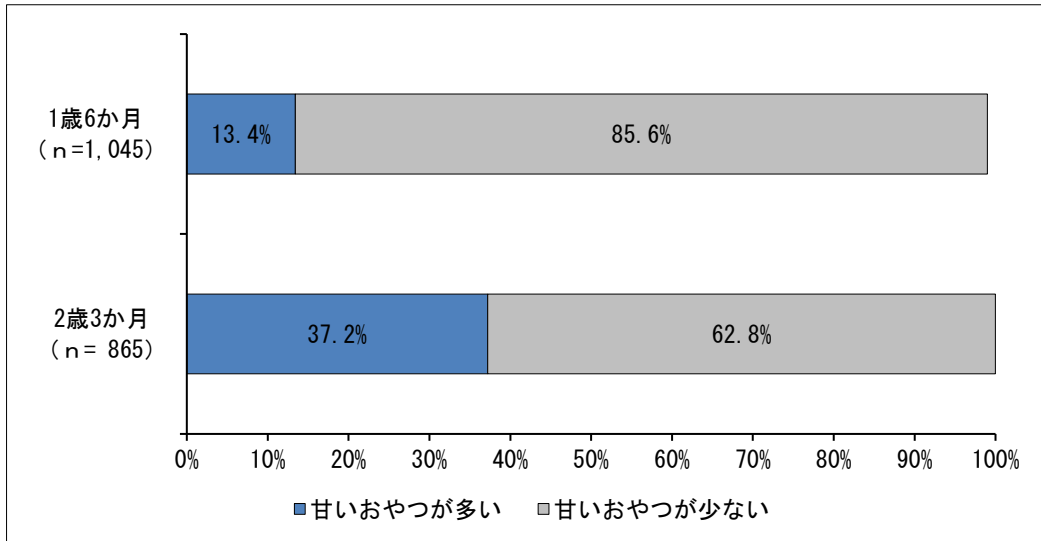


資料：令和元年度乳幼児健康診査・2歳3か月歯科相談

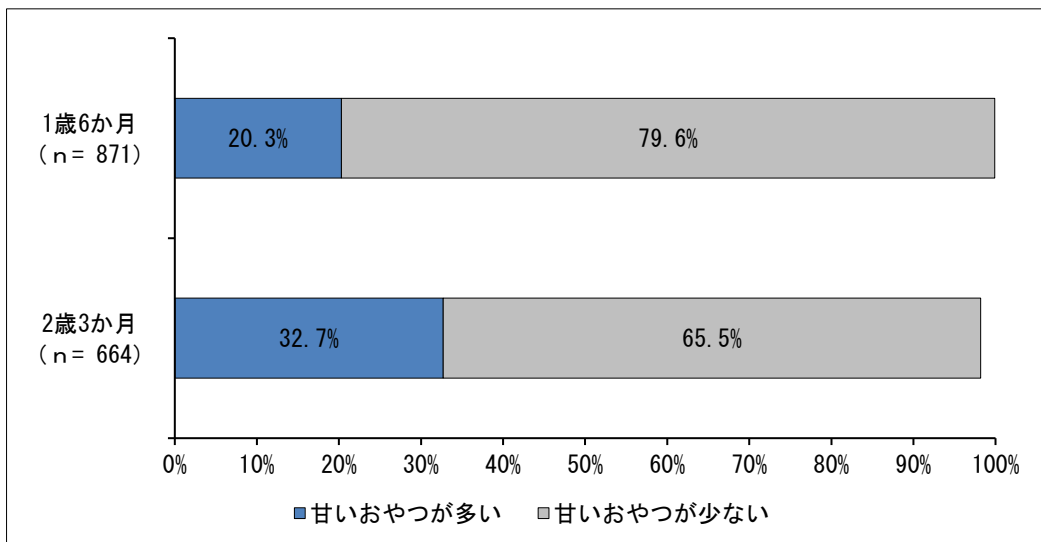
③ おやつについて

甘いおやつを多く摂る割合は、1歳6か月児から2歳3か月児で約2倍に増加しています。2歳ではいろいろなものが食べられるようになるので、甘い物をおやつとしてあげる習慣が家庭でも出てくると考えられます。

平成26年度と比較して、2歳3か月児が、甘いおやつを多く摂る割合は減少しています。



資料：平成26年度乳幼児健康診査・2歳3か月歯科相談

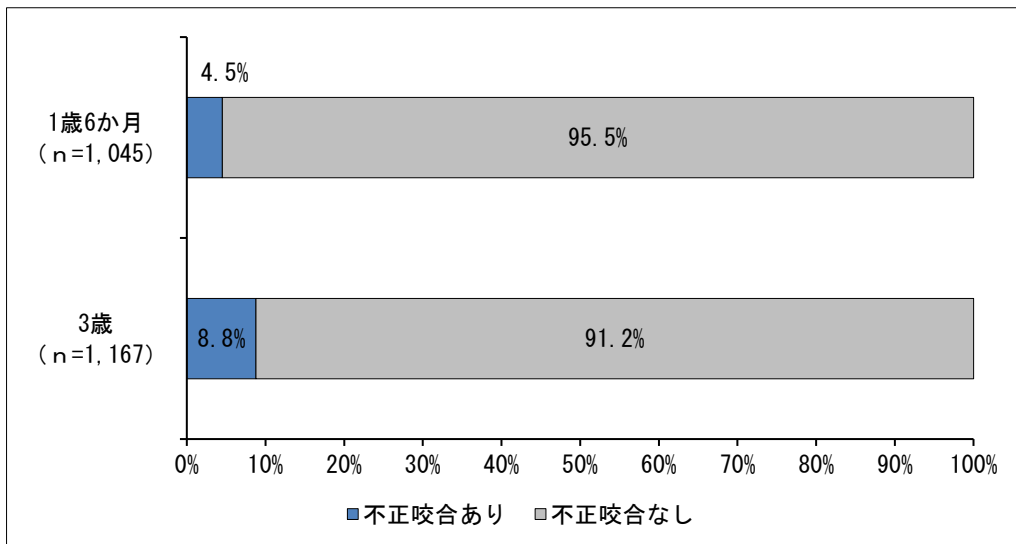


資料：令和元年度乳幼児健康診査・2歳3か月歯科相談

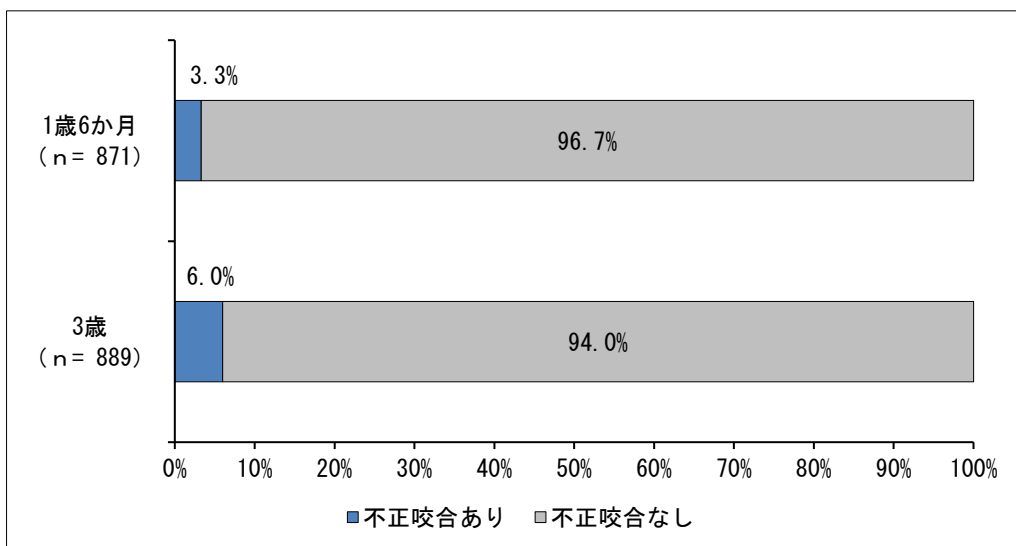
④ 不正咬合の有無

1歳6か月では生えている歯の本数も少なく、不正咬合を判定しにくいですが、3歳になると乳歯が生えそろうため、不正咬合を見極めやすくなり、割合が増加しています。

平成26年度と比較して、1歳6か月児及び3歳児とも、不正咬合の割合は減少しています。



資料：平成26年度乳幼児健康診査



資料：令和元年度乳幼児健康診査

(2) 課題

- ・乳幼児のむし歯保有率は、減少傾向にありますが、年齢が上がるにつれ、おやつに甘い物を多く摂っている者が増加しています。
- ・仕上げみがきの実施率が高いが、むし歯の保有がある程度あることから、きちんと歯みがきできていない可能性があります。

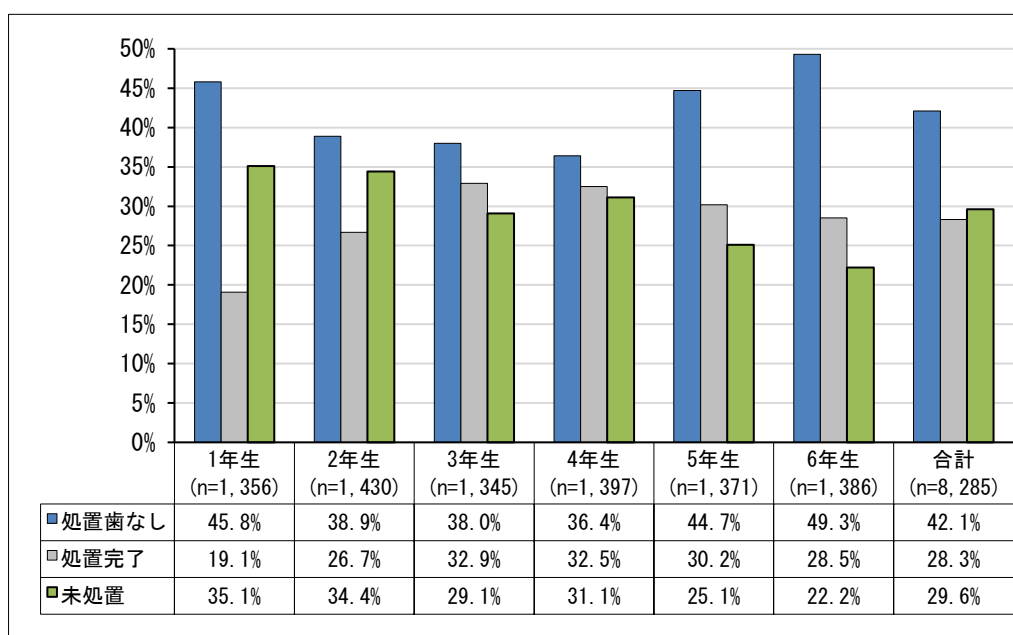
2 学齢期

(1) 現状

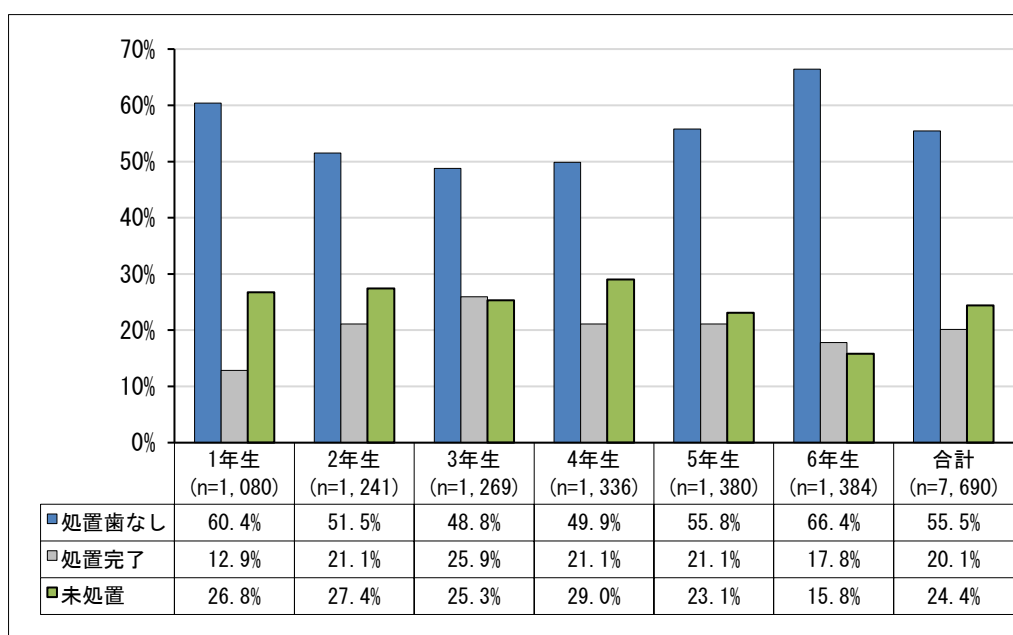
① 小学生

I 処置状況

乳歯と永久歯が混在する時期である中学年では、処置歯のない割合が低くなっています。中学年になると仕上げみがきの機会が少なくなることもあり、みがき残しが多くなるのが原因と考えられます。平成26年度と比較して、各学年とも処置歯のない割合が大幅に増加しています。



資料：平成26年度学校歯科健康診査

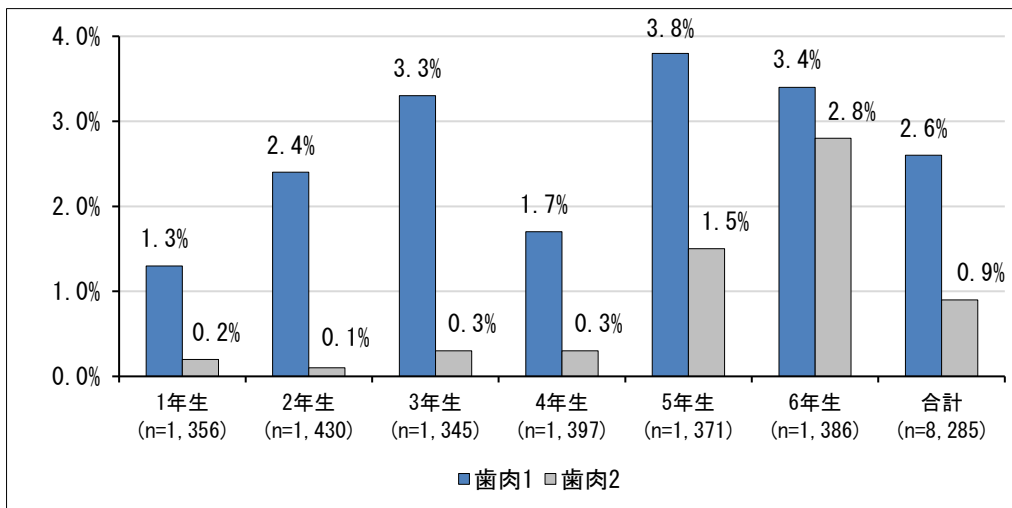


資料：令和元年度学校歯科健康診査

II 歯肉の状態

高学年では、歯肉に異常のある割合が高くなっています。さらに、学年が上がると歯肉の状態が重症化しています。

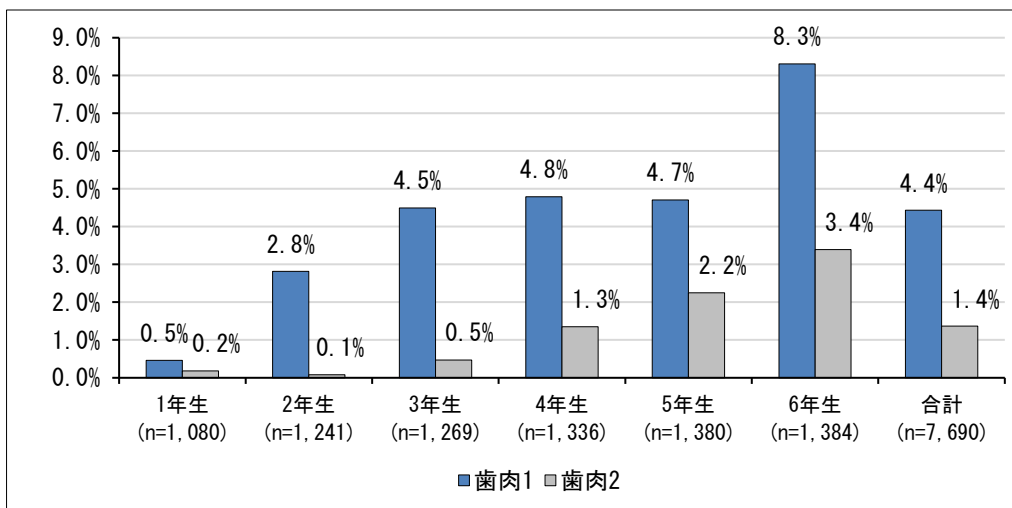
平成 26 年度と比較して、歯肉に異常のある割合が 1～3 年生は減少傾向にあります。4～6 年生は増加傾向にあります。



凡例：歯肉 1：歯肉に軽度の炎症があり歯石の付着なし

歯肉 2：歯科医師による精密検査や診断・治療が必要な歯周疾患がある

資料：平成 26 年度学校歯科健康診査

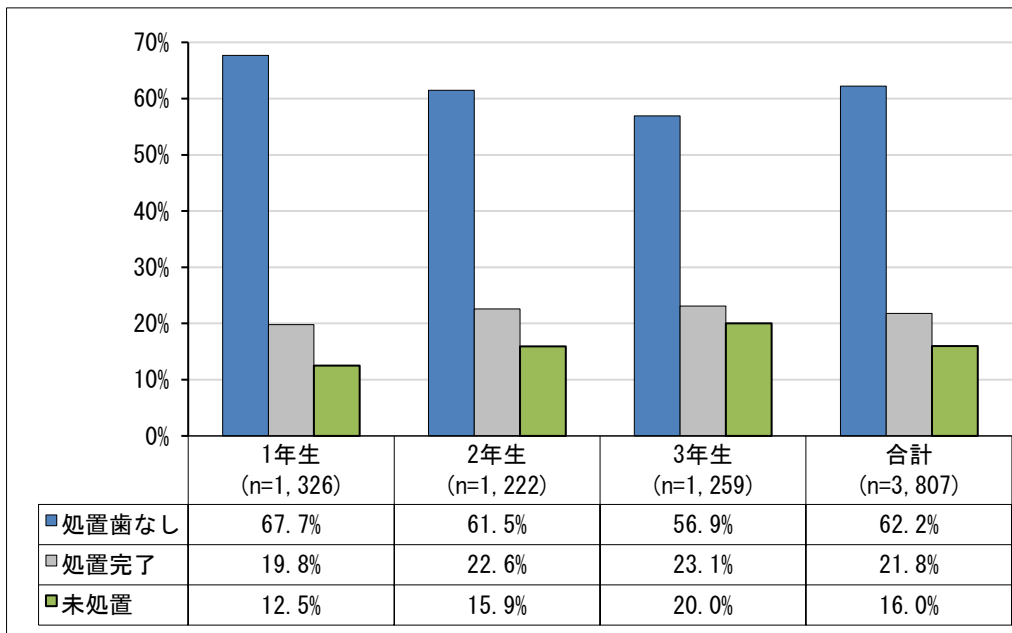


資料：令和元年度学校歯科健康診査

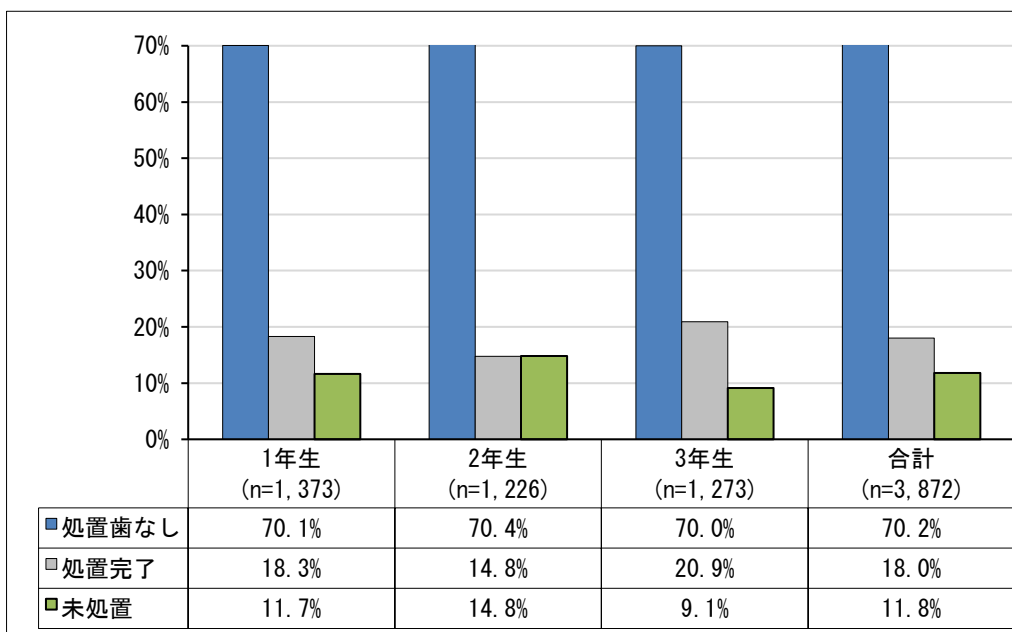
② 中学生

I 処置状況

中学生は、永久歯が生えそろう時期となるので、処置歯なしの割合が高くなりますが、学年が上がるにつれて、未処置の割合も高くなっています。平成26年度と比較して、処置完了の割合及び未処置の割合が減少している傾向にあります。



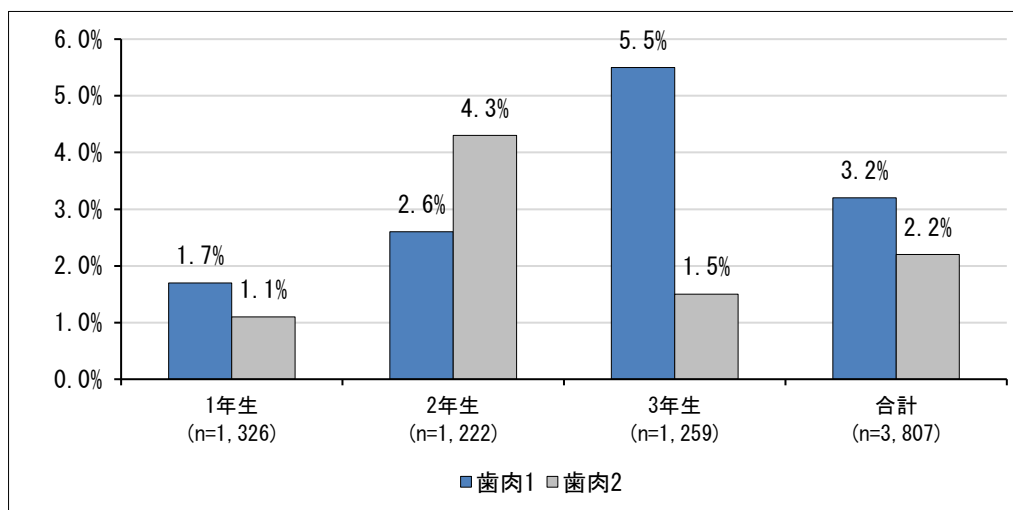
資料：平成26年度学校歯科健康診査



資料：令和元年度学校歯科健康診査

II 歯肉の状態

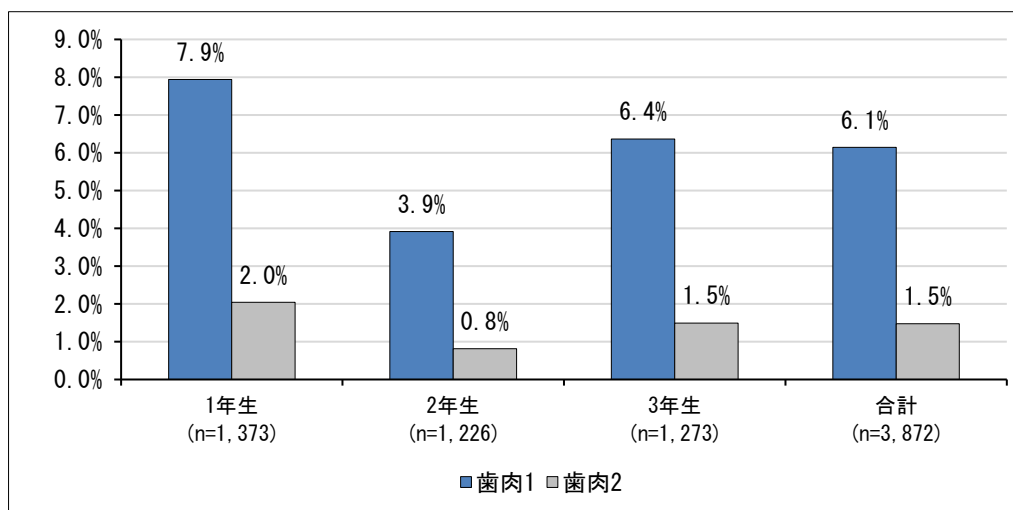
学年が上がるごとに歯肉に何らかの症状がある割合が増加しています。歯肉1が増えていることから、今後歯周疾患にかかる割合が増加していくことが予想されます。平成26年度と比較して、歯肉1の割合が、各学年とも大幅に増加しています。



凡例：歯肉1：歯肉に軽度の炎症があり歯石の付着なし

歯肉2：歯科医師による精密検査や診断・治療が必要な歯周疾患がある

資料：平成26年度学校歯科健康診査



資料：令和元年度学校歯科健康診査

(2) 課題

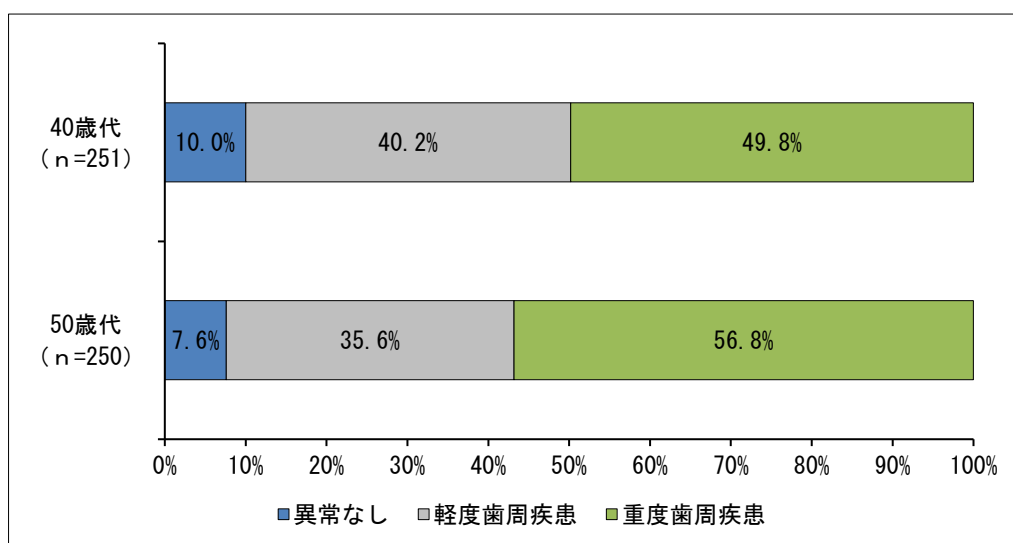
- ・乳歯と永久歯の混在するみがき残しが多い時期に、むし歯や歯周疾患の予防の取組の強化がないため、小学校中学年で各疾患が増加しています。
- ・中学生では年々、処置歯なしの割合が増加しているものの、処置完了の割合が減少するなど、学校健診の結果を治療につなげられていない家庭も多くなっています。

3 成人期

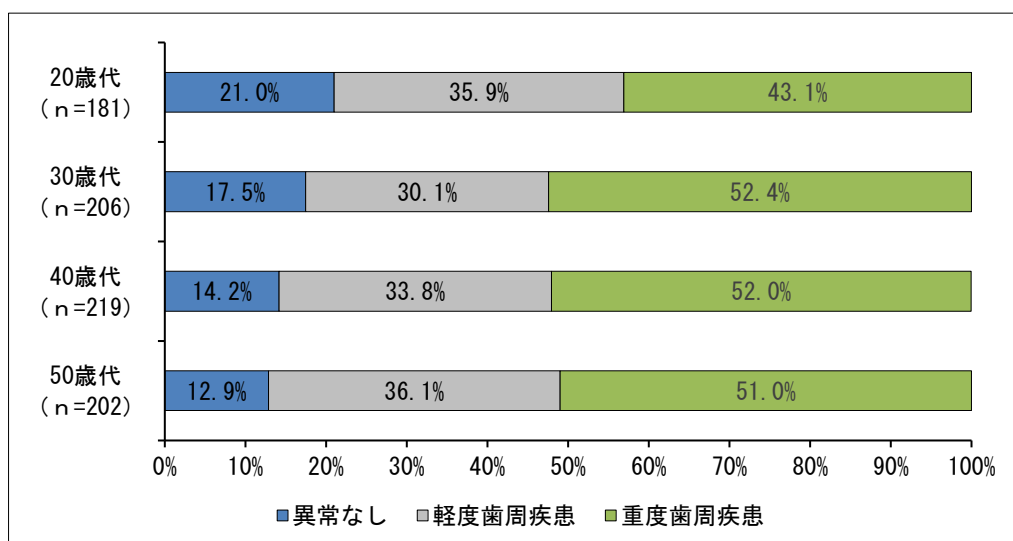
(1) 現状

① 歯肉の状態

40代、50代ともに歯周疾患に罹患している割合は、8割以上となっています。重度の歯周疾患の者も半数を超えていることから、口腔内に対する関心の低さがうかがえます。平成26年度と比較して、減少傾向にあるものの、歯周疾患に罹患している割合は高いままです。



資料：平成26年度歯周疾患検診



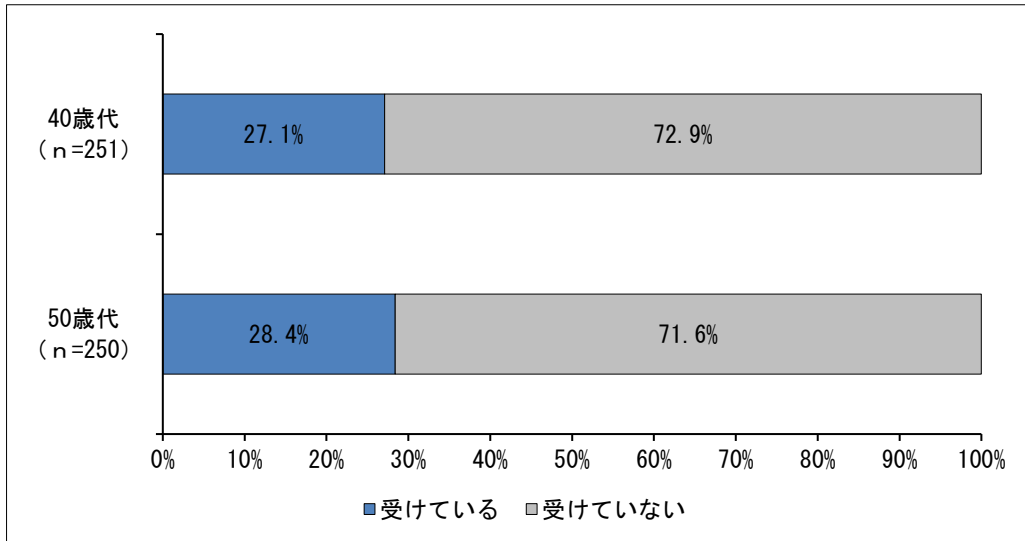
資料：令和元年度歯周疾患検診

※歯周疾患検診については、平成27年度に20歳を追加、平成28年度に35歳を追加、平成29年度に25歳、30歳を追加しています。

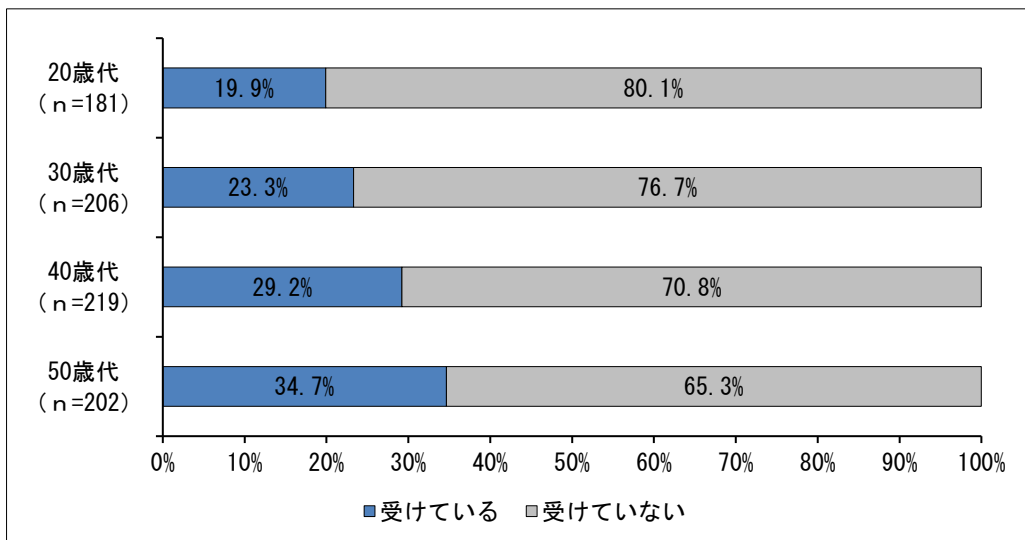
② 歯科健診の受診（1年以内に受けている）

歯科健診を受けていない者の割合は、6割を超えています。このことから、予防として歯科医院に定期的に通院する者が少ないことが分かります。特に若い世代が受診していない傾向にあります。

平成26年度と比較して、40歳代、50歳代は増加傾向にあるものの、受診率は低い状況です。



資料：平成26年度歯周疾患検診

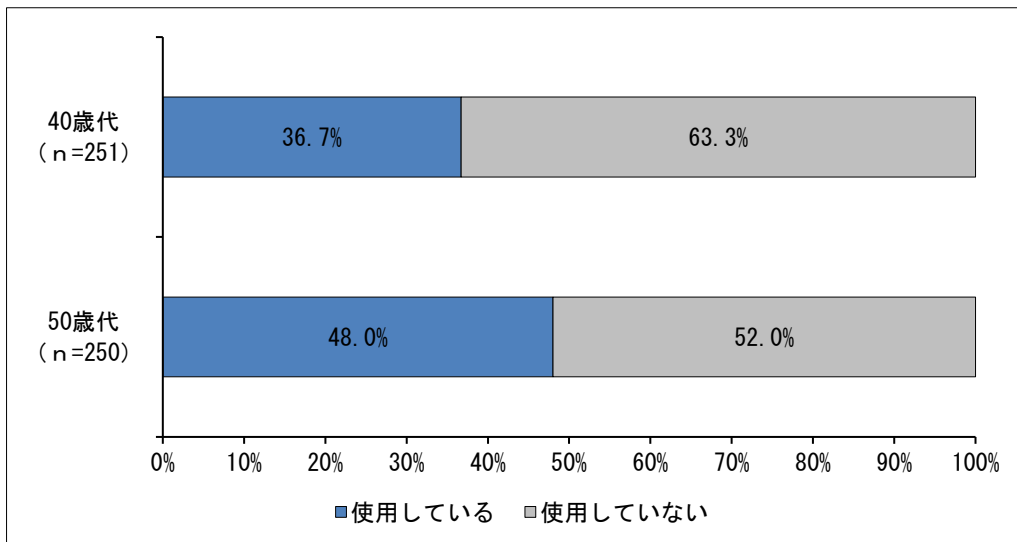


資料：令和元年度歯周疾患検診

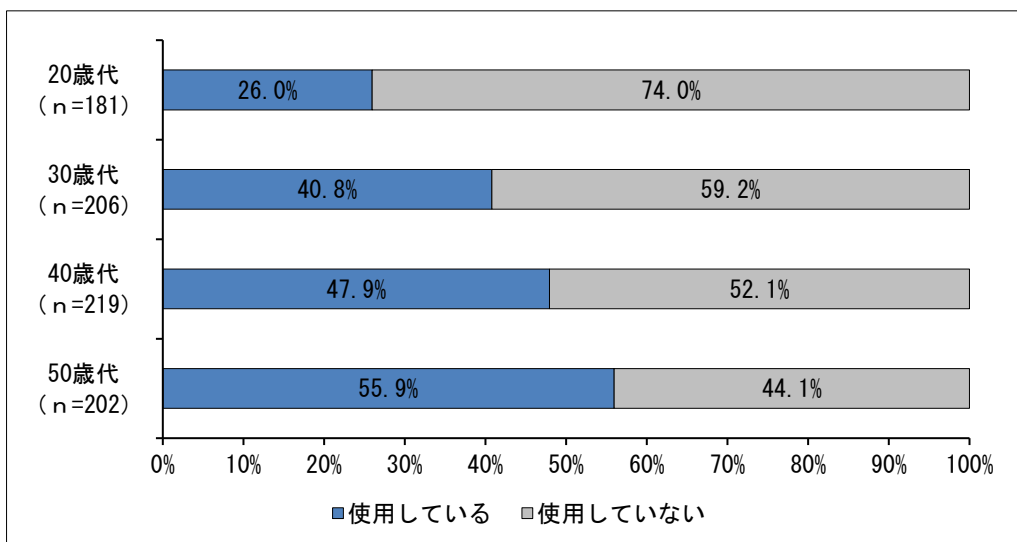
③ 歯間清掃用具（糸ようじ、歯間ブラシなど）の使用

年代が高いほど、歯間清掃用具の使用割合が比較的高くなっています。年齢が上がると歯肉の状態も重症化していることから、意識して歯みがきをしている者が増えていると考えられます。

平成 26 年度と比較して、40 歳代、50 歳代は増加傾向にあるものの、若い世代は使用が少ない状況です。



資料：平成 26 年度歯周疾患検診

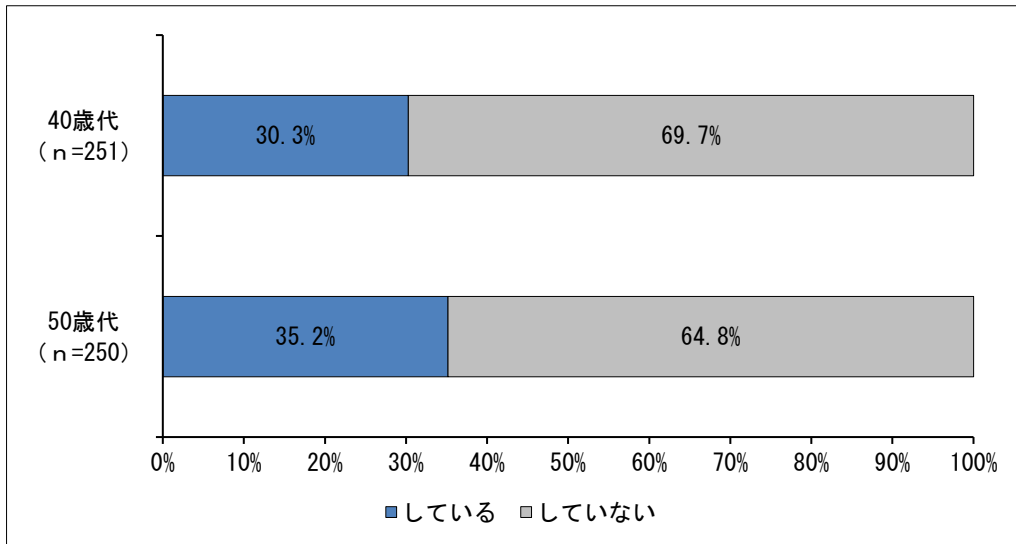


資料：令和元年度歯周疾患検診

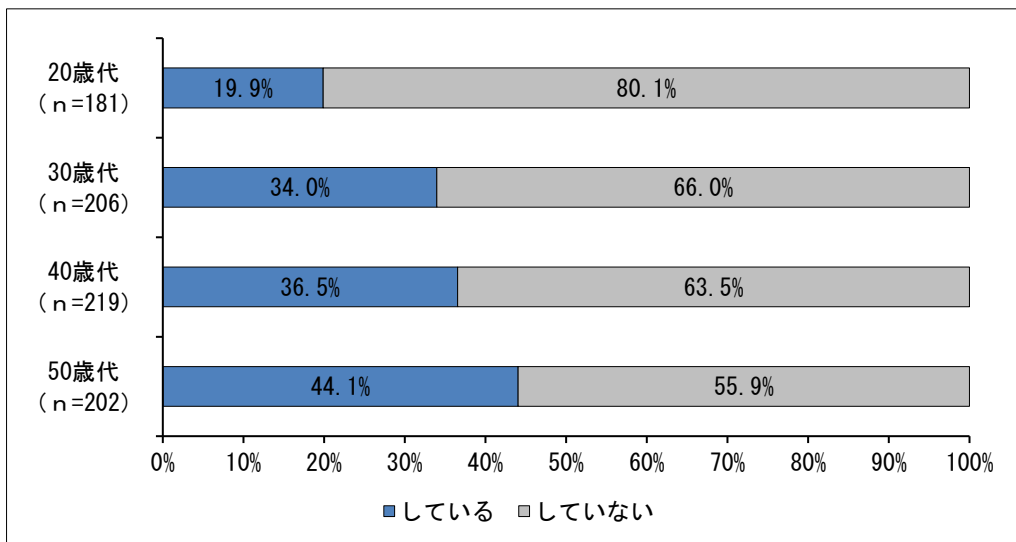
④ 歯石の除去（1年以内の実施）

歯石の除去をした者の割合は、歯科健診を受診した者の割合より高くなっていることから、歯石の付着など気になることがあれば受診行動につながっていることが分かります。

平成26年度と比較して、40歳代、50歳代は増加傾向にあるものの、若い世代の除去が少ない状況です。



資料：平成26年度歯周疾患検診



資料：令和元年度歯周疾患検診

⑤ 現在歯数

喪失歯がないと考えられる 28 本以上の現在歯を保有している割合は、年齢が上がるごとに減少しています。しかし、平均現在歯数を見ると、27 本以上保有している人が多いことから噛むことには問題がない状態といえます。

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～	28 以上	平均 本数
40代 (n=235)	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	8.1%	85.5%	5.1%	76.2%	27.8本
50代 (n=245)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.4%	15.1%	78.8%	3.7%	53.9%	27.1本

資料：平成 26 年度歯周疾患検診

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～	28 以上	平均 本数
20代 (n=177)	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%	83.1%	14.1%	91.5%	28.5本
30代 (n=208)	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%	81.7%	12.5%	84.1%	28.4本
40代 (n=222)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	7.2%	77.9%	14.4%	78.4%	28.3本
50代 (n=202)	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	1.0%	12.9%	81.2%	4.4%	60.4%	27.4本

資料：令和元年度歯周疾患検診

⑥ 未処置歯数

未処置歯を保有していない割合は、半数以上となっています。

平成26年度と比較して、未処置歯を保有していない割合は増加しています。

本数	0	1~5	6~10	11~15	16~20
40代 (n=251)	54.6%	36.3%	6.4%	2.0%	0.7%
40歳 (n=144)	52.1%	38.9%	6.9%	1.4%	0.7%
50代 (n=250)	64.4%	32.4%	2.4%	0.4%	0.4%

資料：平成26年度歯周疾患検診

本数	0	1~5	6~10	11~15	16~20
20代 (n=177)	63.3%	32.8%	2.8%	1.1%	0.0%
30代 (n=208)	59.1%	35.1%	4.8%	1.0%	0.0%
40代 (n=222)	58.6%	38.3%	3.1%	0.0%	0.0%
40歳 (n=104)	57.7%	40.4%	1.9%	0.0%	0.0%
50代 (n=202)	72.8%	26.2%	0.5%	0.5%	0.0%

資料：令和元年度歯周疾患検診

(2) 課題

- ・歯周疾患に罹患している割合が高いことから、今後喪失歯数が増えていくことが予想されます。
- ・学校卒業後は歯科健診を受ける機会が減ることで、歯科医院への受診や通院が少なく、歯科健診、歯石除去の実施率が低くなり、歯や口腔の健康に対する関心度の低さが見られます。
- ・口腔がんは、50歳代以降に発生率が高まる疾患で、重症化すると日常生活へ大きな影響を及ぼします。50歳代の歯科健診の受診が3割程度であり、定期的な歯科健診を受けることで早期発見できることがあるため、口腔疾患に関する知識を持つことが必要です。

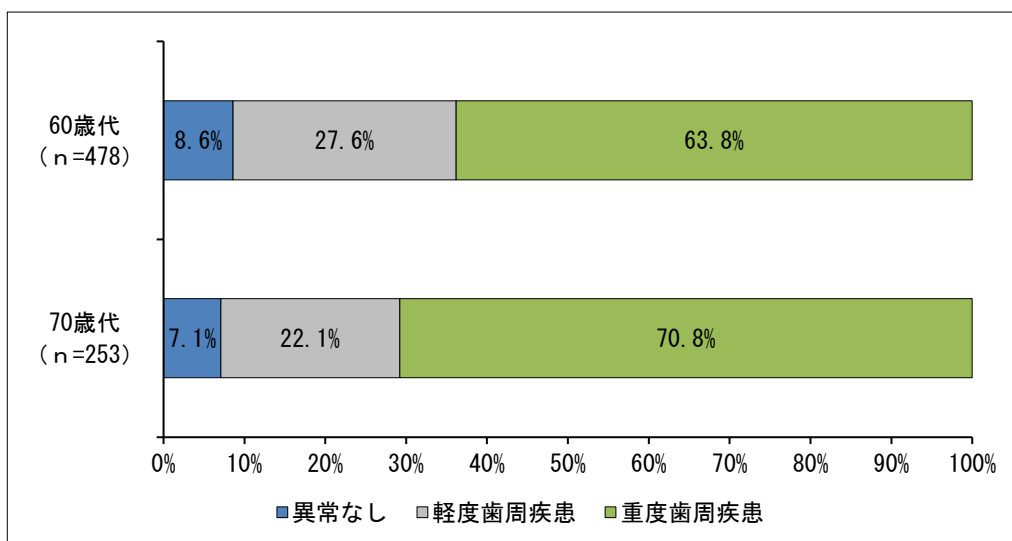
4 高齢期

(1) 現状

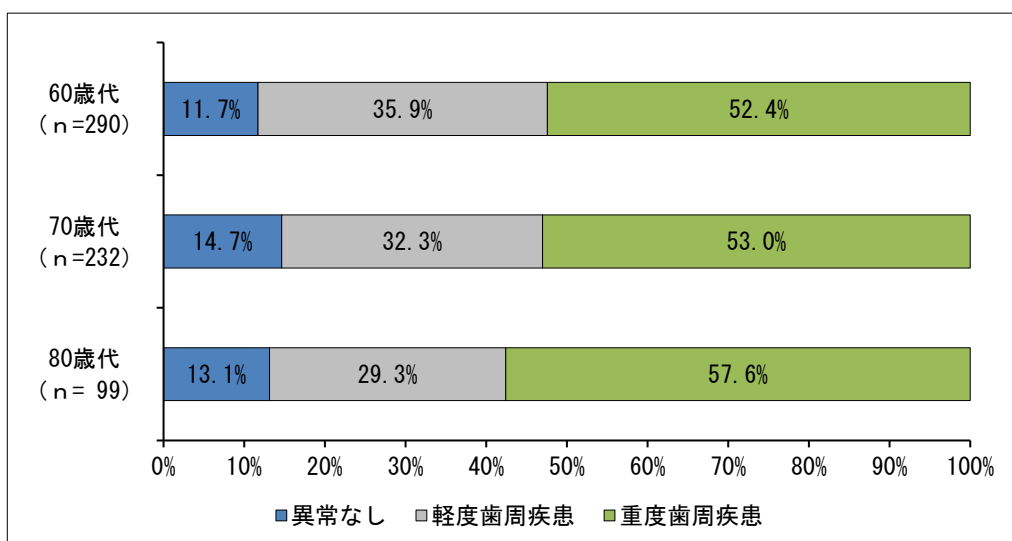
① 歯肉の状態

歯肉に異常がない割合が低く、多くが何らかの所見を有しています。年齢が上がると重度の歯周疾患に罹患している割合も増加しています。

平成 26 年度と比較して、異常なしの割合が増加しているものの、重度歯周疾患の割合が増えています。



資料：平成 26 年度歯周疾患検診



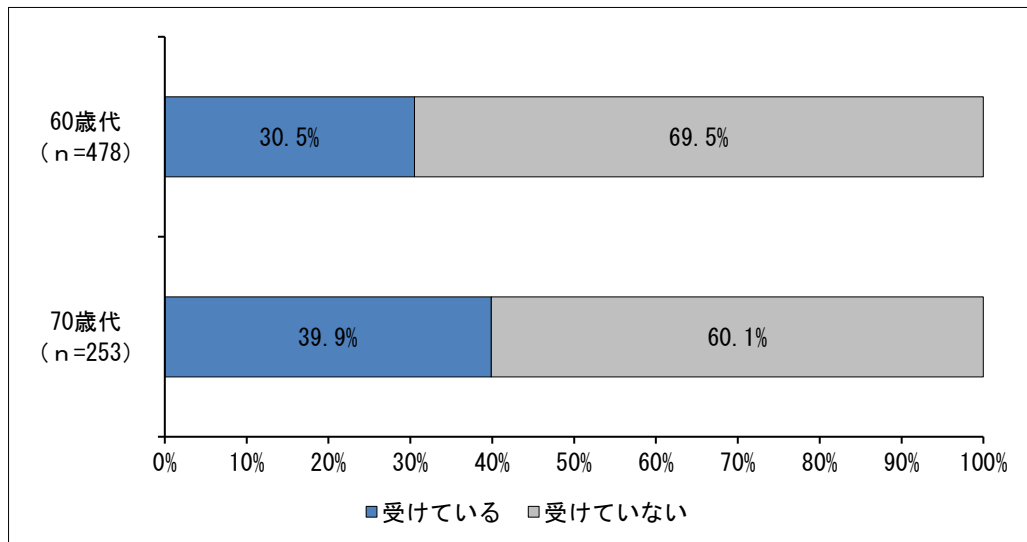
資料：令和元年度歯周疾患検診

※歯周疾患検診については、令和元年度に 80 歳を追加し、20 歳から 80 歳の 5 歳刻み全てが対象となっています。

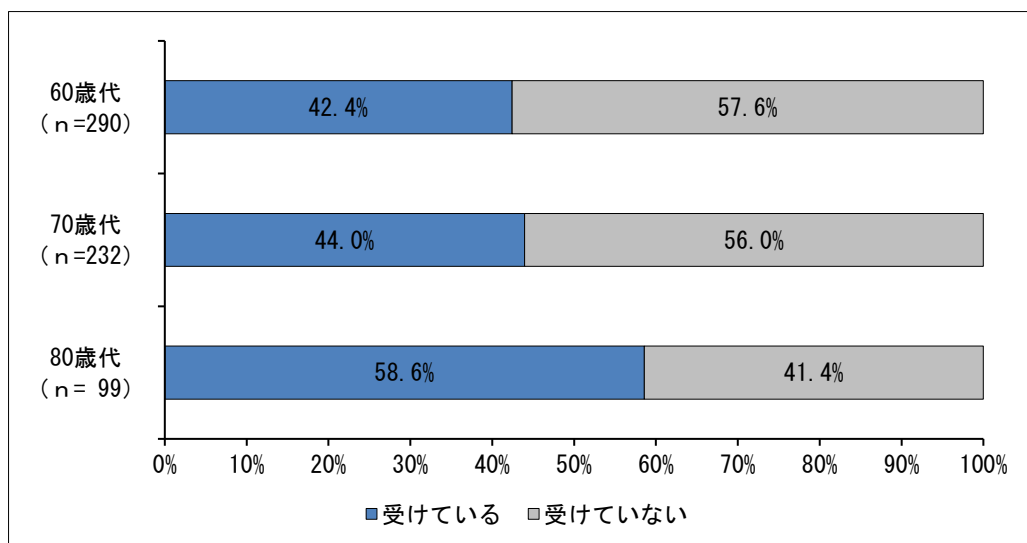
② 歯科健診の受診（1年以内に受けている）

歯科健診を受けている割合は低く、予防としての歯科医院受診は習慣付けされていません。

平成26年度と比較して、歯科健診を受けている割合は増加しています。



資料：平成26年度歯周疾患検診

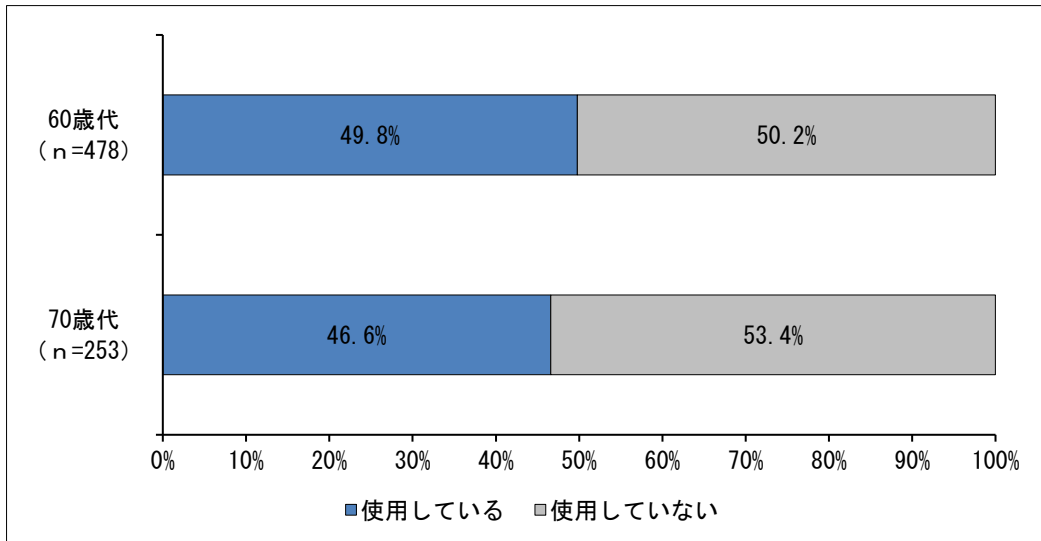


資料：令和元年度歯周疾患検診

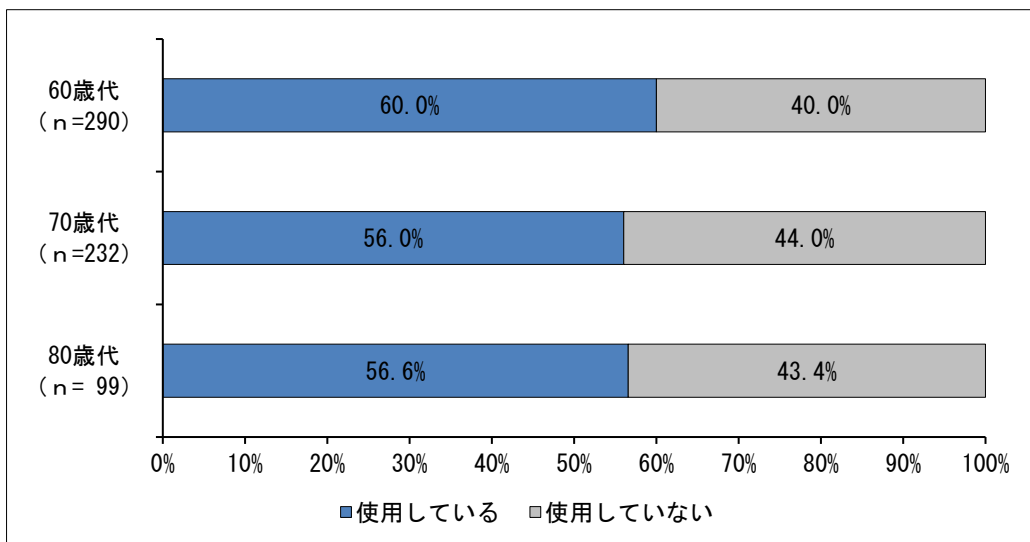
③ 歯間清掃用具（糸ようじ、歯間ブラシなど）の使用

歯間清掃用具を使用している割合は約半数となっています。年齢による割合の差はほぼなく、家庭における歯みがき習慣で歯間清掃用具の使用を普及していく必要があります。

平成 26 年度と比較して、歯間清掃用具を使用している割合は増加しています。



資料：平成 26 年度歯周疾患検診

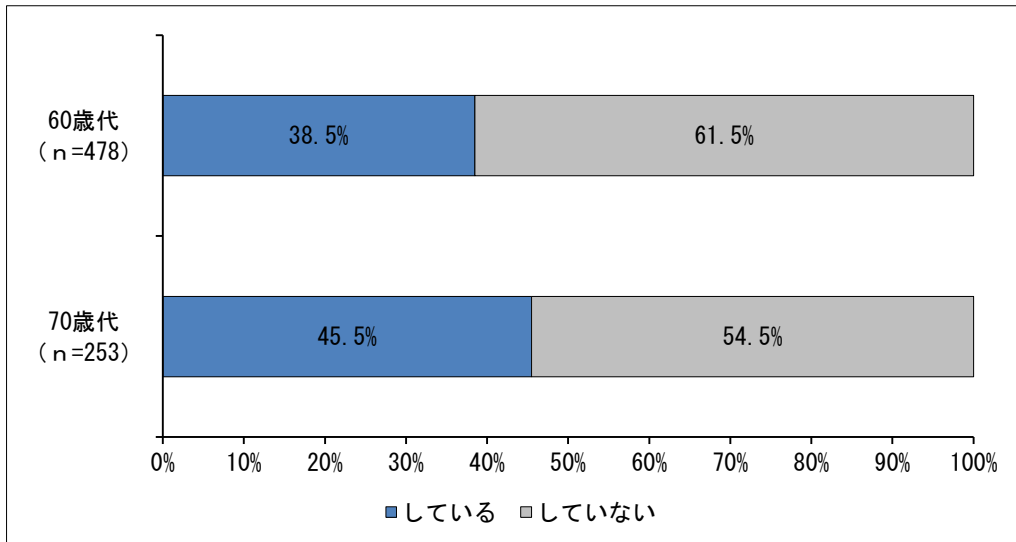


資料：令和元年度歯周疾患検診

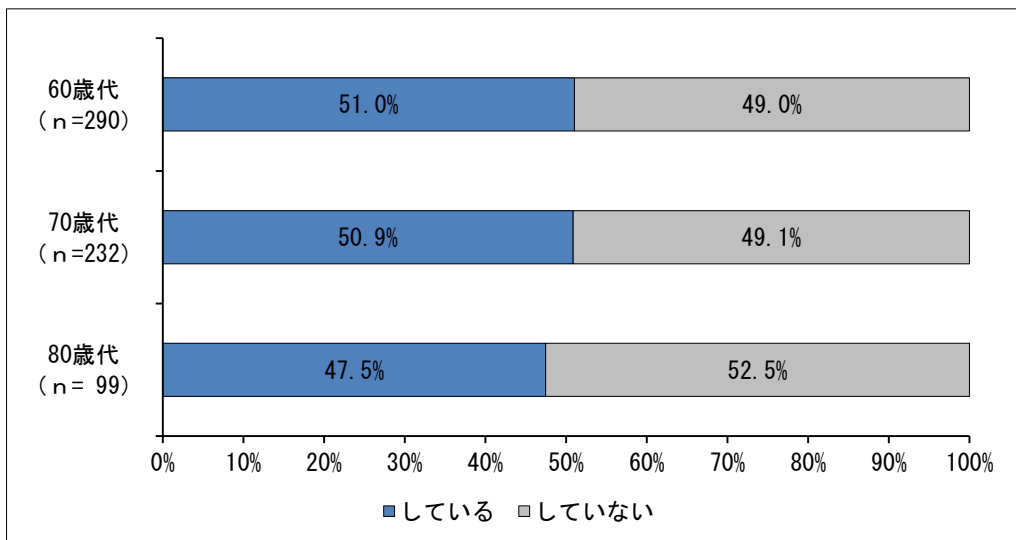
④ 歯石の除去（1年以内の実施）

成人期と比較すると歯石除去を行っている割合は高くなっています。加齢に伴い、口腔内の環境も悪くなり、歯石の付着が気になるため、受診につながっていると考えられます。

平成26年度と比較して、歯石の除去を行っている割合は増加しています。



資料：平成26年度歯周疾患検診



資料：令和元年度歯周疾患検診

⑤ 現在歯数

噛むことへの影響を考えると 20 本以上の現在歯があることが望ましいことから、多くの人は噛むことに不自由なく過ごせていることが分かります。

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～	28 以上	24 以上	平均 本数
60 代 (n=477)	0.8%	0.6%	1.3%	2.7%	6.5%	24.4%	62.0%	1.7%	33.4%	77.9%	25.1 本
60 歳 (n=166)	0.6%	0.0%	0.0%	3.0%	4.2%	25.3%	66.3%	0.6%	34.9%	81.9%	25.6 本
70 代 (n=254)	0.0%	0.4%	3.1%	5.9%	9.8%	29.5%	48.0%	3.1%	26.4%	-	23.9 本

資料：平成 26 年度歯周疾患検診

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31～	28 以上	24 以上	平均 本数
60 代 (n=290)	0.0%	0.3%	1.0%	0.3%	2.8%	27.6%	65.2%	2.8%	33.8%	81.7%	25.9 本
60 歳 (n=117)	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	1.7%	22.2%	71.8%	3.4%	41.0%	88.9%	26.5 本
70 代 (n=230)	0.0%	2.2%	2.2%	3.4%	9.6%	27.8%	52.2%	2.6%	24.8%	69.6%	24.1 本
80 代 (n=101)	1.0%	4.0%	5.9%	9.9%	19.8%	27.7%	30.7%	1.0%	16.8%	47.5%	20.6 本

資料：令和元年度歯周疾患検診

⑥ 未処置歯数

未処置の歯を保有する割合は、年齢が上がるごとに増加しています。この背景には、高齢により歯科医院に通院することが困難になることが一因と考えられます。

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25
60代 (n=251)	65.6%	31.4%	2.2%	0.2%	0.2%	0.2%
60歳 (n=144)	65.7%	30.7%	1.8%	0.6%	0.6%	0.6%
70代 (n=250)	61.8%	36.2%	1.6%	0.4%	0.0%	0.0%

資料：平成26年度歯周疾患検診

本数	0	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25
60代 (n=129)	61.2%	32.6%	4.7%	1.5%	0.0%	0.0%
60歳 (n=117)	70.1%	29.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
70代 (n=213)	59.6%	37.6%	2.8%	0.0%	0.0%	0.0%
80代 (n=202)	72.8%	26.2%	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%

資料：令和元年度歯周疾患検診

(2) 課題

- ・ 歯科健診を受けている割合が、歯石除去や歯間清掃用具の使用よりも低いことから、症状や気になることがないと歯科医院への受診につながりにくくなっています。
- ・ 年齢が上がるほど重度の歯周疾患に罹患している割合が多くなっており、歯の喪失につながりやすい状況です。
- ・ 8020（ハチマル・ニイマル）運動の推進の点から、歯を20本以上保有している人の割合は、60代で9割程度、70代で8割程度、80代で6割程度となっており、年齢とともに減少しています。

5 障がい者、要介護高齢者等

(1) 現状

① 障がい者入所施設での歯科健診実施状況

野田市内の障がい者入所施設では、定期的に歯科健診を実施しています。

② 要介護高齢者施設での歯科健診実施状況

野田市内の特別養護老人ホームと要介護老人保健施設では、17施設中3施設で定期的に歯科健診を実施しています。

③ 寝たきりの高齢者に対する歯科治療の状況

歯科診療が受けられない65歳以上の在宅寝たきり者に対し、口腔内の衛生管理や保健指導、歯科治療を実施しています。

(2) 課題

- ・特別養護老人ホームや介護老人保健施設で定期的に歯科健診を受けている割合が低いことから、口腔衛生の悪化や症状の重症化につながりやすくなっています。
- ・介護者（家族・施設職員）の口腔の健康の保持・増進に関する知識や口腔ケア技術が未熟であることが考えられます。
- ・歯・口腔の健康を維持することは、むし歯や歯周病を予防するだけでなく、摂食嚥下機能を維持し、誤嚥や窒息等を防いで全身の健康を守るとともに、食事や会話を楽しむなど、QOL（生活の質）を確保するためにも重要です。
- ・障がいの種類によっては、摂食嚥下機能の問題を抱えていることや、口腔内の状態が把握しづらく、口腔ケアが不十分になりやすいため、歯科疾患が重症化しやすくなります。また、医療機関等への受診が難しく、専門の医療機関の受診が必要になるなどの理由から、定期的な歯科健診の受診といった予防の取組がより重要となります。このため、障がいのある人がかかりつけ歯科医を持ち、地域で歯科健診や歯科治療、歯科保健指導等を受けられる環境づくりが求められます。

第 1 次計画の数値目標と達成状況

【評価】○：現状値が目標値を達成

△：現状値が目標値を達成していないが策定時の数値より改善

×：現状値が目標値を達成せず策定時の数値より悪化

ライフステージ等	指標	第 1 次策定時 (H26)	目標値	現状値	評価
乳幼児期	3 歳児でう蝕のない者の割合の増加	82.3%	90%	85.8%	△
	3 歳児で不正咬合が認められる者の割合の減少	8.8%	5%	6.0%	△
	1 歳 6 か月児で毎日保護者が仕上げみがきをする習慣のある者の増加	80.9%	100%	93.2%	△
学齢期	12 歳児でう蝕のない者の割合の増加	67.7%	70%	59.1%	×
	中学生における歯肉に炎症所見を有する者の割合の減少	5.5%	5%	7.6%	×
成人期	20 歳代における歯肉に炎症所見を有する者の割合の減少（注 1）	31.7%	25%	27.1% (H26)	△
	40 歳代における進行した歯周炎を有する者の割合の減少	49.8%	25%	52.0%	×
	40 歳で未処置歯を有する者の割合の減少	47.9%	10%	42.3%	△
	40、50 歳代における過去 1 年間に歯科健康診査を受診した者の増加	27.7%	65%	32.0%	△
高齢期	60 歳代における進行した歯周炎を有する者の割合の減少	63.8%	45%	52.4%	△
	60 歳で未処置歯を有する者の割合の減少	34.3%	10%	29.9%	△
	60、70 歳代における過去 1 年間に歯科健康診査を受診した者の増加	33.8%	65%	43.2%	△
	60 歳で 24 歯以上の自分の歯を有する者の割合の増加	81.9%	85%	88.9%	○
	80 歳で 20 歯以上の自分の歯を有する者の割合の増加（注 2）	38.3%	50%	51.2% (H28)	○
障がい者 要介護高齢者等	定期的に歯科健診を実施する障がい者（児）入所施設・要介護高齢者施設（入所型）の割合の増加	50%	70%	26.3%	×

※（注 1）（注 2）の現状値：

野田市の現状値がないため、国の計画である「健康日本 21（第二次）」の現状値を採用